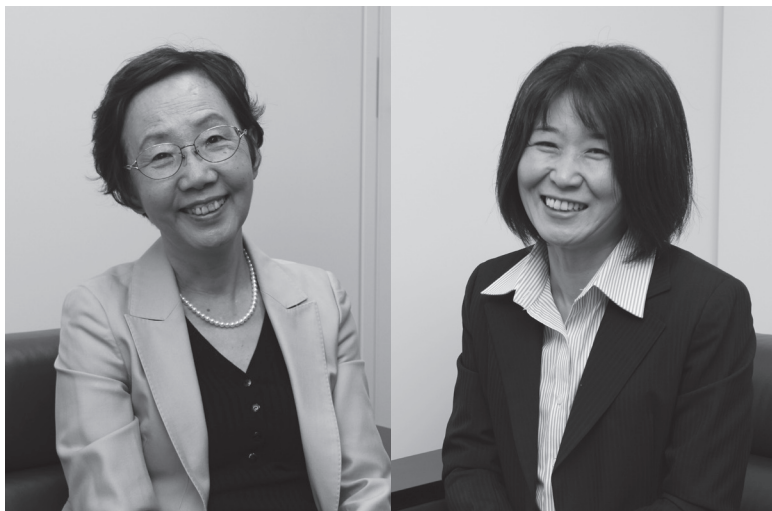


特集

祖父母



桜美林大学大学院
老年学研究科 客員教授

マタニティガーデン／
畿央大学助産学専攻科 臨床教授

直井 道子 岡 いくよ

対談

今日の育児と祖父母

赤ちゃんを産み育てる

直井 岡さんが主宰されているマタニティガーデンは、どんな活動をされているのでしょうか。

岡 主に産前産後のお母さんをサポートしています。具体的には、妊娠中の方や1歳までの赤ちゃんを持つママを対象に、育児を学ぶクラスの開催や個別での相談などの活動をしています。私はもともと周産期の育児支援が研究テーマで、産後退院されたお母さん方が日常生活に円滑に戻れるよう、医療と家庭生活の移行期を結びつけるような役割をめざして、マタニティガーデンを始めました。

直井 そういった活動を通して、岡さんは出産・育児の現状や祖父母の役割について、どのように感じていますか。

岡 最近、育児に関する相談を受けて驚くのは、病院で教わったことに忠実すぎる人が多いことです。専門家の意見を聞きすぎて、日常生活に合わないことでも守ってしまうお母さんが増えているように感じます。例えば、抱いているときに揺さぶると「揺さぶられっこ症候群」になると聞いた人は、ほんの少し揺さぶることもしないようにするし、抱くことで愛情が伝わると聞けば、どんなに長時間でもずっと抱っこし続け疲れてしまう。

そういったお母さんの育児を見たおばあちゃんからも、よく相談を受けます。明らかに極端なやり方だと思っても、お嫁さんに育児についての意見を言ったら嫌われたくないと。そのとき私は「わかりました、私が言いますから」とおばあちゃんには言って、お嫁さんには「今はこう言われているからこうしたほうがいいですよ」と伝え、間を取り持つような役割をしています。

直井 何を言って、何を言わないかの線引きは難しいですが、赤ちゃんによくないことであれば、お嫁さんに多少は憎まれても言うてもいいとも思いますが、実際には言えずにじっと我慢している方が多いのかもしれませんが。

岡 お母さんは赤ちゃんの扱い方がわからないのに、今の育児の常識に従いますし、それが危なかしくて、おばあちゃんたちは横で見ているハラハラされています。

直井 おむつがとれる時期や離乳の時期は、昔は早い方がいいと言われましたが、今はゆっくりです。私たちの頃と今とでは、育児についての常識が変わっているのも、おばあちゃんは口を出しづらいでしょうね。

岡 そうなのです。また最近は、仕事を持っていて、30代後半以降に出産して、育児休暇を取っているという方も多く相談に来られます。

直井 高い年齢での出産も増えてきていますからね。

岡 40代で初産も珍しくありませんが、初産が遅いとしんどい部分もいろいろあります。子育てというものは、ちょっと適当に手が抜けたり、いい加減ゆったりできることが必要な面もありますが、そのくらいの年齢の女性だと、いわば「自分」がしっかりとある分、そうできずにしんどくなってしまうところがあるように感じます。

直井 20代前半に赤ちゃんを出産された方は、まだ自分が遊びたい時期に束縛され不満もあるのに対して、40代近くになって産めば、そうした時期も既に経ているので子育てにスムーズに取り組める——そんなイメージを持っていましたが、実際はそうでもないのですね。

岡 そのくらいの年齢になっていると、お母さんの中には、自分は「いい母親」でなくてはと思い過ぎる傾向がみられます。できて当たり前で、「できない」と言えなくなってしまう人もいます。

直井 そうなると、素直にアドバイスを聞くことも難しくなってしまうかもしれませんね。

岡 泣いたらひたすらずっと抱いていて、日常生活にも支障が出るほどになっているお母さんの姿は、おばあちゃんの目には「あんなに赤ちゃんに振り回されて」と映るようです。でも、お母さんに言ったとしても、「今は泣かしっぱなしでは周囲から虐待と思われる」とも言われます。

直井 子どもを育てにくい社会になっていると感じますね。

「公園デビュー」という言葉があります。子育てについて、同じように悩みを抱える育児ママ同士が仲良くなって、「毎日何時に来ましょう」と決めて、それでうまくいく人もいますが、逆にストレスになっている人もいると聞きました。

岡 はい。最近のお母さんには、そもそも「公園デビュー」を避けようとする人もいますね。あえて他の人がいない時間帯に子どもと公園に出かける人もいます。もしもお互いにすごくなじんで、信用できるような場がくれたら、逆にしっかり結びつきができるのですが、そうでなかったら、お母さん同士の関係ができるまでに非常に時間がかかる例が多い気がします。

直井 そういった人はママ同士の話もなく、おばあちゃんの話も聞かない、孤立した状態ですね。そうすると専門家の意見をそのまま受け入れるしかないんでしょうね。

岡 そうなのです。でも、専門家といっても価値観はさまざまですし、その意見に従ったらかえってしんどい思いをしたというお母さんもたくさん見してきました。

他方で、お産後の早い時期から自分のしたいことを抑えることができずに、ベビーシッターを雇ってでも、ショッピングに行かなければ我慢できないママもいらっしゃいます。

直井 あまり他に楽しいこともなく、育児で頭がいっぱいになるよりは、ベビーシッターさんに預けて買い物に行くことがあってもいいかなと思います。でも、その頻度があまりにも多いと、それはどうなんだろうとは思いますが。

岡 子どもの育て方や、子どもがどう育つかに正解はありませんので、特定のやり方が必ずだめというわけではありませんが、やはり気にかかるのも事実です。というのも、子育てには、どうしても親が少し我慢することが必要な時期があります。お母さんの中には、その我慢がうまくできず「自分が1番」という気持ちを持ち続けてしまう人もいます。

赤ちゃんを産み育てるというのは、いわば自分の力だけではどうにもならない経験をするのではないかなと思います。これまでの生き方がだめというわけではありませんが、お母さんたちには、少なくとも今までの生活を見直すいいチャンスで、自分が後回しになることなど、他者を優先させる経験はお母さん自身にとってもステップアップし成長できる機会なのでは、と考えています。

子育てと祖父母

直井 おばあちゃんが相談に来られる場合は、母の方が多いですか。

岡 はい。母と娘の関係が強くなっていると感じます。距離感をうまく取っている場合も、くっつき過ぎている場合もあります。

お母さんとおばあちゃんの仲が良いと、赤ちゃんはいろんな目で育てられるという良さがあります。お母さんだけに育てられた赤ちゃんの中には、不安が強く、離れるとずっと泣いてしまうような例もあるように感じます。

一方、ふわっと、ゆったりしているなど感じる赤ちゃんは、おばあちゃんが育児をサポートしている場合が多いです。ただ今度は、おばあちゃんへの依存度が高すぎて心配になる例もないわけではないのですが。

直井 私が身近で耳にするのは、共働きのサポートとして、おばあちゃんがかんりの分量の育児を引き受けている例です。頼られるのはうれしいし、やれるときにやってあげなきゃと思い、育児を手伝うそうですが、実は負担が大きくてしんどいという思いもある。ある人は、週に5日間、毎日幼稚園に孫を迎えに行って、娘の家に行って、ご飯を食べさせて帰ってくるという、多大なサポートをしていました。別の若いお母さんは、自分の母親だけでなく、義理のお母さんも分担して何日かずつ手伝ってもらっているそうです。さらには、おばあちゃんが娘の単身赴任について行って孫の面倒を見るケースも聞いたことがあります。短い期間なんだから私が支えなきゃ、という思いからそうするようです。

その一方で、何となく遠慮があって、何か頼まれたときなど、理由がないとお孫さんに会えない、会いにくいと感じているおばあちゃんもいます。

岡 そうですね、「えっ、会わせてもらえるの?」というふうな例は、確かにありますね。遠慮せずにもうちょっと会おうよ、と言いたくなるような。

直井 遠慮があってめったに会えないので、たまにお嫁さんから「預かってくれる?」と言われると、おばあちゃんが喜んで飛んで行く、という感じで

すね。

岡 少し前までは、自分も母になったんだからという思いで、おばあちゃんにも「いや、子どものことは私が見ますから」と言って、自ら一生懸命やってお姑さんには手を出してほしくない、手を出させないという人がみられました。だから遠慮もあったのだと思います。しかし最近では、おばあちゃんが手伝ってくれるというのなら、どうぞどうぞと進んで受け入れる人が多くなってきたように感じます。

直井 そうですね、手伝ってくれるんだったら文句なし、という人は確かにいるように感じます。

岡 でも、おばあちゃん世代の方は一方で親御さんの介護も抱えられていて何だかとても大変そうですね。

子育てへのアドバイス

岡 子育てについてあれこれお姑さんに言われたときは、「お医者さんがこうした方がいいと言っていた」と言えば口を挟めない、とあるお母さんが話していました。そういう言い方だと通るという点からも、子育てについて専門家というものの立ち位置を考える必要があると感じます。影響力があまりに大きいので。

直井 今はインターネットが普及し、お母さんもすぐにいろんな情報を得られます。専門家だからとあがめられる場合もありますが、お母さんも専門家の意見を絶対だと思わないわけではないから、専門家は何をどう話したらいいか難しいですね。

岡 インターネットで専門家による正解を探すというよりも、さまざまな見解がある中で、自分にとって都合がいい答えをネットで探し出して安心する、というのが実情に近いと思います。正面からはっきり間違っていると指摘されることや、自分の考えを軌道修正されることには抵抗があるようです。

直井 確かに、40歳くらいになると、簡単には考えを軌道修正できないかもしれませんね。

岡 私も相手の年齢を見て、無理には軌道修正をしない関わり方をしています。

直井 相手はどう受け取るかを、いつも気をつけて話されているんですね。

岡 周産期の女性はとても素直で、子どもの事になると一生懸命で少し冷静に聞き流すという事ができない面がありますので「私の話が絶対と思って、受けとめ過ぎたらしんどくなるからね」とか、「自分がいいと思うところだけ聞いてくれたらいいですよ」と。

直井 じゃあ、おばあちゃんがお嫁さんに話すときも、そういう風に「頭の隅にちょっと置いて」といった言い方をすれば、受け入れてもらえるかもしれませんね。

岡 「こうやったら、赤ちゃんがこんなによくなった」など、赤ちゃんのいいところをおばあちゃんから娘さんなりお嫁さんなりに伝えてあげると、赤ちゃんをいい方に評価されるのはお母さんにとってとてもうれしいことなので、スムーズに進むことがあります。

直井 若いお母さんは自分がどう評価されるかということに、非常に過敏になっているんですね。お母さんにとって評価されてうれしいのはどういう点なのでしょう。やはり赤ちゃんがうまく育っているという点になるのでしょうか。

岡 はい。やっぱり赤ちゃんですね。

直井 でも赤ちゃんの育ち方は、自分で努力してどうにかなることばかりではないので、なかなかしんどい部分ですね。

岡 以前、「買った育児本に6カ月になったら寝返りができて、7カ月、8カ月でお座りができ、ハイハイもできるようになると書かれているのに、自分の子どもは6カ月になってもハイハイしないので不安だ」という相談もありました。個人差があり、育児本に書いてある通りに育つとは限らないということを私に言われて、安心できてよかったと言っていました。そうした例のように、過剰な受け止め方を自分で相対化できないしんどさがあるようです。

母親はどう育児を学ぶか

直井 生活の中で、家事の重みはどんどん減って



います。極端に言えば、すべて外食して、掃除も適当に済ませることだって可能です。でも、赤ちゃんにかかわる家事をやらずに済ませるわけにはいかず、必ず毎食つくったりしなければならなくなると、非常に負担感があると思います。しかもそうして家事をしても、特に評価されるわけでもない。人からの評価まで考えると、ますますしんどい面があると思います。祖父母に接するだけでも少し楽になるのではとも思いますが、実際に会うと否定的に評価されてしまうリスクが気にかかるのでしょうか。

岡 お嫁さんの中には、自分がやっていることと、少しでも違うことをお姑さんに言われるのは負担に感じる人がいるのは確かだと思います。もちろん全員ではありませんが……。

目の前の赤ちゃんがどう感じているかよりも、知識としてもっていることを過度に重視してしまうお母さんもいますし、赤ちゃんのほんの少しのことにも注意しようとするあまり、過度に神経質になってしまうお母さんもいます。本当にいろいろです。

直井 個人差が広がっているのですね。

岡 はい。そうした個人差が広がることを、それ

だけ自由になったとだけ見られてしまって若い親御さんは気の毒です。行き過ぎになっている部分があっても、かつてなら、例えば祖父母がしてくれることで気づくこともあったでしょうが、今ではおじいちゃんやおばあちゃんも遠慮がちなので、結果的にお母さんも見直す機会がないまま、軌道修正されないままになり、それが個人差の広がりになっているように感じます。

直井 しんどくてもじっと我慢してしまうんですね。育児ってこんなに大変なんだと思い込んで。

「赤ちゃんが何でも1番で、自分は大事にされない」とお父さんが思うことはありそうだと思っていましたが、むしろお母さんの側にいろいろ起こっているのでしょうか。

岡 お母さんの方が、「自分みたいなダメな母親に育てられる子どもはかわいそう」と思ってしまいうことが少なくありません。最初は誰だって新米ですし、ダメな母親で当たり前のはずですが、ダメではいけない、最初からきちんとできないといけない、と感じてしまうお母さんがいるというのが現状だと思います。

直井 一般的な出産教室や育児教室では、育児に関しての理想像しか伝えないのですか。

岡 妊娠中の話の中心はお産に関することです。お産がどのようなものかを伝え、安産を目指して夫婦で頑張りましょうといった感じで。

妊娠中に育児の話をしようにしても、お母さんたちもイメージがつかないようです。一般的に育児の準備用品などの話や育児技術として沐浴などの話だけで、子育てをする中で具体的にどういう大変さを経験するか、どういう思いを抱くようになっていくかといった点までは、伝わらないことが多いと思います。育児の大変さを見る機会がないので、子育てはこんな風なんだと納得する機会もない。

直井 新生児の健診をはじめ、生まれた子どもに対する施策は多々ありますが、産後のお母さんについては支援が十分ではないように思います。妊娠中は母子手帳に母親の健康をチェックする欄がありますが、出産後はすべて子どもに関することばかりだという記事をよんだことがあります。育

児の大変さや個々の子どもの多様性について、お母さんに知らせる機会はないのでしょうか。

岡 そうかもしれませんね。お母さんがお母さんになることを学ぶ場所がすごく少ないと思います。私がマタニティガーデンを作ったのは、妊娠中の女性やお母さんたちの、病院に行くほどじゃないけどもなかなか人に言えないような心配や不安に寄り添っていきたくて考えたからです。

マタニティガーデンにやってくる人たちは、ほとんどが口コミを通じてです。妊娠中も出産後も、行政や病院の健診を受ける以上の相談先はないと思っていて、自分の心配についてどこに行って話したらいいかわからなかった人たちが、マタニティガーデンの存在を知って「こんな施設があったんですか」と言ってくれることが多いです。

あと、祖父母が近くに住んでいなかったり、既に亡くなってしまっている夫婦もあります。そうした場合は、子育てを手伝ってもらえないし、相談することもできないので、孤独感を感じているケースもあります。ただ他方で、近くに祖父母がいなくて大変だけどその方がせいせいするという方もいますし、近くにいてもあまり積極的に関わろうとは思わないという方もいます。この点でも、やはり多様です。

大きくなった孫と祖父母

直井 生まれた赤ちゃんが成長してもっと大きくなると、祖父母の役割も違ってくと思いますが、どうお考えでしょうか。

岡 経済的な状況によって違いも大きいのですが、おばあちゃんたちは育て方にはなかなか口を挟めなくて、お金を出すだけの存在にとどまっていることが多いように思います。

お母さんからみると、祖父母の存在は、お金を出してくれる人、もしくは時々自分が遊ぶときに子どもを見てくれる人になっていることが少なくないと感じます。具体的なおけいこごとの内容を決めることの主導権は全部親御さんで、祖父母はお金だけとられる、という印象です（笑）。

直井 お金をわざわざ出すということは、祖父母



は教育熱心な例が多いということでしょうか。

岡 多いですね。

直井 今のママたちは豊かに育てられ、おけいこが盛んだった世代だから、自分の子どもにも小さいときから何かやらせたいと思っているのでしょうか。

岡 そのおけいこについて、無料で習えるものがあるならそれはそれでいいけれど、お母さんたちの中には、有料の講座や施設があるのなら、むしろそちらの方を選ぼうとする人もいます。知らない人が大勢集まる場所で習う無料のものよりも、有料だけど質がいいものならそちらに関心が向くようです。目が肥えているお母さんたちもいて、そのあたりの考え方は多様です。

直井 そのための費用は、祖父母が出すことも多いということでしょうか。

岡 お母さんの年齢による違いがあるように思います。例えば、30代後半のママたちは自分がお金がある程度持っていることが多いので、それほど祖父母に出してもらうことはないようです。

直井 生まれた子どもが男の子か女の子かによって、親の反応に何か違いはありますか。

岡 一般に女の子は喜ばれることが多いと思います。女の子が生まれたときは、周囲の人もよかつ

たねと言いますが、男の子が生まれた場合は大変だね、しんどいでしょうと言うんです。男の人は受難の時代だと思います（笑）。

直井 祖父母の反応はどうでしょう。

岡 それも同じです。仮に娘が子どもを生んで、生まれた子ども（孫）も女の子だったら、女系が続くことになりますが、そうすると、おばあちゃんにとって近い関係が続くわけです。嫁に出したはずの関係なのに、そちらの孫の方が密接になっている。

直井 いろんな調査の結果を見ても、おばあちゃんと女の子の孫は、いろんな行き来があって、非常に仲が良く、お互いに親しいという傾向があります。男の子の孫だと、小さい時は親しくても、小学校になったぐらいからは、それまでよりは疎遠になる傾向があるようです。

岡 子どもが男性だと、お嫁さんが来てもおばあちゃんは口が出せないと感じるようです。

ある知人で、息子さんに急に子どもができ、結婚することになった人がいます。それまでその知人は、自分には娘がいらないから、孫ができてもその孫は自分のものではなく、関係のない存在になってしまうと考えていたそうです。息子しかいないという時点で、将来の孫とのかかわりについて早々にあきらめてしまっていたわけです。ところが、その後お嫁さんが孫と一緒に自分の家に同居してくれることが決まりました。すると「うれしい、うれしい」と舞い上がっていました。

直井 それほどまでに我慢していたんですね。ところで、そうしたケースでは、若いお父さんの考えはどうなのでしょう。お父さんは「うちのおふくろに孫をもっと見せてやれよ」と妻に言わないのでしょうか。

岡 遠慮して言えないんじゃないでしょうか。実家に孫をもっと見せてあげたくても、お父さんが妻の実家に気を遣ってしまう。

孫世代にとって、祖父母との関係は素敵なものだと思います。孫は祖父母から、親から学ぶこととはまた違う、さまざまなことを学べるのではないのでしょうか。その関係を、親たちがコントロールするのではなく、うまく自然につながっていく、

おじいちゃんやおばあちゃんから学べることを、自然なつながりの中で孫に学ばせてあげることは、とても大事なことだと思います。

直井 「祖父母の存在が、自分にとってどのように役立っていると思うか」をたずねた調査結果を見たことがあります。高校生にもなると、なかなか祖父母と会う機会も少なくなるのですが、意外にそれまでに祖父母から伝えられたものを感じ取っているという結果でした。おばあちゃんには親に怒られたときにかばってもらったという思い出があるとか、おじいちゃん存在を通じて伝統や家風を感じ取っているなど、祖父母の存在は何かの意味を孫に伝えているようです。

死ぬことや病気なども、祖父母がいることで少しでも関心を持てるようになったという回答もあり、孫は多くのことを祖父母から感じ取っているようです。

岡 自分が教えている生徒たちを見ていると、祖父母からももらったものをとても大事にしてい、離れて暮らしていても祖父母は大切な存在だとレポートにもよく書いてきます。授業で病気に関する話をする、うちの家系にはおばあちゃん直伝の風邪スープのレシピがある、なんて話も飛び交います。自分の根っこはお父さんとお母さんだけにあるのではなくて、おじいちゃんやおばあちゃん、さらにはもっといろいろな人の上にあるのだということを認識できるのは、とても大きいと思います。

直井 私も、担当していた高齢者福祉の授業で、祖父母のところに行って、あなたと同じ年のときに何をしていたのか、ということと、今の若い人へのメッセージを聞いてくるという課題を出したことがあります。すると、予想していたよりもずっと素直に、本当にいろんなことを聞いてきて、いろいろ感じたり考えたりする。おじいちゃんから戦争のことを聞いて、「自分たちが好きだけ勉強もできて、遊べて、何て恵まれているんだろう、もっと時間を大切にしなきゃいけないと思った」とか、割と素直に言うんです。

おじいちゃんやおばあちゃんの側も、若い人にメッセージなんて言われても気恥ずかしく感じる

かとも思ったのですが、みなさん結構いいことを言ってくさるんです。改めて聞かれれば、普段言いたいと思って言えなかったことだけど、いろいろ思いを語ってくれます。

岡 大学生ぐらいになっていると、祖父母の存在は気にはしていますが表面には出さないでしょうから、学校で聞いてくるように言われたとか、大義名分があれば、若い人の素直な部分がよく出て、いろいろ感じ取るように思います。祖父母との直接のかかわりは、孫にとってはどこか宝物のような感じもあるのではないのでしょうか。

祖父母に限らず、いろんな人と関係を結んでいこうと思ったら、もっとオープンになっていく必要があると思います。

直井 その手始めとして、祖父母との関係を見直すのはいいことでしょう。友達関係でもいいのですが、やっぱり身近な親族との関係には、特別の大切さがあると思います。

子育てと父親

直井 最近では、お父さん向けの子育て教室もありますね。

岡 イクメンパパですね。今のパパたちには、本当によくやっている人が少なくないと思います。私は父親向けに「パパ・力アップセミナー」といった教室をすることがあります。そのときの印象からも、上の世代と比べても非常に育児に協力的になっているのに、それでもまだ十分でないと言われることがあるのを見ると、大変やねと思います。

直井 私たちの世代だと、共働きの夫婦なら、お父さんももっと育児をやってよと言われたものでしたが、今は共働きか専業主婦かに関係なく、お父さんである以上育児への参加が求められるようになっていると感じます。

岡 以前、妊娠中の夫婦向けの教室で、ある参加者のパパが、「女って妊娠するだけでそんなにえらいんですか」と質問して、会場が凍りついたことがありました。その男性も、決して子育てに協力したくないからそう質問したわけではなく、素朴に、体感できないことなのでピンと来ない部分

があったから言ったようです。「そういう気持ちはすごくよくわかりますけど、今の世の中では子どもは母親1人ではやっぱり育てられないほどしんどいことなので、そういうところを意識してほしい」と答えましたが。お父さんの育児協力が進んでいるように表面では見えても、もしかしたら心の中ではそこまで思っていないのかもしれない。

共働きの夫婦でも、あまりに形式的に線引きをして子育ての負担を半々にしようとして、しんどそうになっている例もありました。そこのおばあちゃんが心配になって相談してきたのですが。

年齢的にも、社会的にもしっかりしているからといっても、子どもを育てる親としてしっかりしているとは限らないのが実状だと思います。ママやパパとしてはまだまだ育っていないことも多いです。

母親にとっての娘の出産

直井 祖父母の年齢層によって、違いを感じられることはありますか。

岡 最近はお母さんの年齢幅が広くなり、それに合わせて祖父母の年齢幅も広がっていますが、祖父母の年齢による違いはさほどないように思います。むしろ、年齢に関係なくお母さんに対して遠慮している気がします。

直井 おばあちゃんも、まだ若くて自分が仕事で忙しかったら、出産や育児のサポートは難しいでしょうね。

岡 そうですね。仕事があるから産後の世話はできないと親に宣言されたというママもいます。ただ、お母さんだけでなく、おばあちゃんにとっても、自分の子どものお産は、自分のステップアップのときです。親子関係がちょっと離れて、自分の子どもとの距離感を再確認するタイミングでもあります。孫が生まれても、「自分もまだ仕事で忙しいから」と言って離れていると、そうした自分の再確認や階段を一步上がる経験をしないままになってしまうことになります。そうすると、親子の関係も見直す機会を逸して、疎遠になったり、逆に過度に密接になったりして、ほどよい距離感の取

り方ができずじまいになる例もあります。だから、祖父母の年齢というよりは、実際にどのような関わり方ができるかによる違いの方が大きいと思います。

私は、お産のときに、きちんとサポートしているおばあちゃんを見ると、すごく素敵だと思います。おばあちゃんは、娘さんの出産に自分を重ね合わせているのでしょうか、「自分が出産したときは」と語りかける場合が多いです。赤ちゃんがお母さんのおなかから出てきたときは、「あなただってこんな赤ちゃんだったのに、こんなに立派になって」と喜びますね。

直井 私の娘は、出産が予定日より早くて、しかも海外での出産だったので、全く間に合わず、出産の1週間後によく顔を合わせることができました。サポートするにはタイミングが合わなかったもので、出産後になってわざわざ行くのもどうかと悩みましたが、やはり行ってよかったと思っています。

出産のとき、おばあちゃん存在は必要だと思います。よほど仲が悪かったらわかりませんが。

岡 海外からお産のときだけ戻ってくるお母さんもいます。「今度、出産した娘と孫を海外まで送り届ける」と言っているおばあちゃんにお会いしたことがあります。出産をともに経験して「本当にいい時間を過ごしています」とおっしゃっていました。

直井 日本人の平均寿命は、女性で85歳を超えるほどになっていますが、それはつまり、母親と娘がつきあう期間は、祖父母になってからもかなり長くなるということです。祖父母が元気で、お金も出してあげられるうちはいいでしょうが、そうではなくなった時にどうなるのでしょうか。お互いの距離感が近いときには、祖父母が要介護になった場合に、娘や息子がひどく狼狽してしまいどう対応していいかわからなくなるという例もあるのではないのでしょうか。

岡 そうかもしれません。親はいつまでも元気であるような錯覚もあり、親に気持ちの上で依存している期間が長くなっているような気がします。だからこそ、成長した娘世代とおばあちゃん世代

との関係を見直すきっかけとして、孫が生まれるということは、重要なタイミングだと思います。

直井 私は、本当に関係を見直す転換点となるタイミングは、孫の出産よりももう少し後に来るのではないかと考えています。祖父母が年をとり、普段あまり晴れがましい話題がない中で、孫の誕生はおめでたい、重要なイベントです。しかし、そのときは祖父母もまだ元気で、体力的にも金銭的にもサポートしてあげる側にいるわけです。その後、やがてどこかの時点で、いわば子どもの方がいろいろな意味で上になる。その時の方がより大きな転換点になるのではないのでしょうか。

孫が誕生したことで、祖父母と娘の関係の密着度が増したとしても、孫が小学生になるぐらいまではそれでもいいと思います。でも、ある時点からは意識的に密着度を薄めていかなければならないということに、祖父母の側も気づく必要があるのではないのでしょうか。

祖父母と孫の交流

直井 今日のお話の中で一番印象的だったのは、祖父母と孫が接する機会をもつこと、それを親が間でコントロールをしようとせず、祖父母と孫に自然な関わり合いを持たせることが、祖父母にとっても孫にとっても非常にいいことだという話です。親がそれに躊躇するのは、親が多分まだ家制度的なものにしばられているからかもしれないし、あるいは子育ての忙しさと不安感の中で、自分の子供を手元にとどめようとして、自分の子供がいろんな人間関係をもつことを素直にいいことだと思えないからかもしれません。これをどうするかは、今後の課題の一つだと思います。

岡 いろいろ難しい面もあるのは確かですが、でもやはり、おじいちゃんやおばあちゃんがすばらしい知恵をいっぱい持ってはるということが、孫にあまり伝えられない、伝える機会が失われているのは、すごくもったいないと思います。

直井 今の制度を前提に言えば、保育園や学校などが、ごくたまにいいので、孫と祖父母をつなぐきっかけを提供できればいいと思います。

学校で言われたからなのか、自分からそうしたのかはわからないのですが、私の娘は、高校生のときに修学旅行先から祖父母に絵葉書を1枚書いて送ったことがあります。それが祖父母にとってはすごくうれしかったようで、喜んでお礼の電話が来るほどでした。娘の方も、ちょっとしたことでこんなに喜んでもらえたのはすごくいい経験だったようで、その後も祖父母のところに1人で泊まりに行ったりするようにまでなりました。

そういうちょっとしたきっかけで、さっき言われた祖父母と孫の直接的な対話が成り立ったわけです。それにはやはり学校が——いま学校は何でもかんでも期待されて大変だとは言われますが——そうしたきっかけを提供できるのでは、と思います。

岡 おじいちゃんやおばあちゃんからこれを買ってもらったとか、物質的なことばかりが祖父母には期待され過ぎているように感じます。もっと精神的なことを託しているというか、祖父母とはあなたの存在を支えている人たちなのだということが、孫に十分に伝わっていないのではないのでしょうか。習い事のお金を出してもらっただけの存在というのは、あまりに気の毒です。祖父母の存在の大事さを、特に親世代がもう少し尊重できればいいと思います。

そういう意味では、先ほど直井先生がおっしゃった、祖父母に話を聞いてくるという課題を学生に出したというのは、すごく素敵な話だと思います。

直井 最近、各教科の教科書の中で高齢者についてどれくらい触れているかを調べる機会がありました。すると本当に少ないんです。例えば生物でも、受精とか成長の項目はありますが、老いに関する部分はありません。小中学校の家庭科と保健にもほとんどない。国語でも、戦争や障害者の問題はありますが、高齢者が扱われることはあまりないのです。老いや死が取り上げられることは本当に少ないです。そういう意味でも、祖父母と実際に接する機会をもつことは、本当に貴重だと思います。

岡 私は、生まれるときこそ死ぬことを考えるのがすごく大事だと思っています。だから、お産のときにこそ、死についても考えてほしいとよく言っています。みんながいつまでも長生きできるわけではないのだから、亡くなるということも考える機会は持ってほしいし、それを生まれた子供にも自分の言葉で伝えていってほしい。それが特にできるのは、やはりおじいちゃんやおばあちゃんではないでしょうか。

※この対談は、2012年10月25日に行われたものです。

なおい・みちこ 桜美林大学大学院老年学研究科客員教授。主な著作に『幸福に老いるために——家族と福祉のサポート』（勁草書房、2001）。老年社会学専攻。

おか・いくよ マタニティガーデン、畿央大学助産学専攻科 臨床教授。主な著作に「育むよろこび～お産はだいじな通過点』（『月刊母の友』福音館書店、5月号、2012）。